

アルバート・マンスブリッジの大学成人教育実践

— 労働者教育協会の設立を中心に —

土 井 貴 子*

はじめに

本論文は、20世紀前半のイギリス成人教育の理論家であり実践家でもあるアルバート・マンスブリッジ (A. Mansbridge: 1876-1952) を取り上げ、彼が1903年に設立した労働者教育協会 (Workers' Educational Association: 以下WEAと略記) における初期の教育実践とその実践の基盤となった彼の大学観を明らかにすることを目的としている。

WEAは、イングランドにおける労働者階級の教育状況を改善し、主として成人を対象により高い水準の教育を普及させることを目的として創設された教育団体である。WEAは、成人教育という点からみると、次の2つの特徴を有していた。第一に、WEAは基礎教育後の教育として、技術教育ではなく教養教育 (liberal education) 及び一般教育 (general education) を主として提供しようとした点あげられる。当時、労働者階級の人々が比較的容易に参加しえた教育機会に、行政が運営する夜間学校、成人学校、生活協同組合などの労働者組織によるものがあった。上記の教育機会の多くでは、教育水準はさほど高くなく、教育内容は基礎的ないし技術的、あるいは娯楽的な要素が強かったといわれる。こうした状況の中で、WEAは、オックスフォード大学と連携して大学での教育に近い教養教育を提供しようとした。この点は、WEAの最大の特質といえる。

WEAの第二の特徴は、労働組合、生活協同組合、教師組合、労働者クラブ、労働者カレッジ、成人学校等の労働者組織と、大学とを教育の下に一つの組織にまとめた点にある。確かに、マンスブリッジがWEAを構想していた1890年代末頃にも大学と生活協同組合との連携が模索されていた。しかし、それは遅々として進まない状況にあった。マンスブリッジ

はこの限界を克服すべく、新たな実践を展開した。

本論文は、この2つの特徴から、WEAの設立者のマンスブリッジの大学観、とくに労働者組織と大学との関係のあり方についての見解とその実現に向けての実践に焦点をあてる。WEAと大学との連携を取り扱った先考研究には、主に大学および大学人に視点を置いた優れた研究がある。この時期のオックスフォード大学における大学成人教育を知性史 (intellectual history) のなかに位置づけたゴールドマンは、「WEAはイルフォードのマンスブリッジの台所から始まったかもしれないが、本当の意味では、その初期の本拠地はオックスフォードにあった」とし、社会改革の理想を掲げ、成人教育の領域で活躍した一群の大学人たちの思想と実践を実証的に明らかにしている¹。確かに、大学人の果たした役割は大きい。しかしながら、結果的にかもしれないけれども、マンスブリッジの登場が大学成人教育の新たな展開につながった。この点を重視して、本論文ではWEAの設立者マンスブリッジに注目する。

マンスブリッジについては、B. ジェニングスによる研究がある²。ジェニングスは生涯にわたる彼の多彩な成人教育活動を明らかにし、類い希な活動家として彼を評価している。本論文では、彼の研究に依拠しつつ、そこではさほど注目されなかったマンスブリッジの大学観に着目する。ジェニングスの研究では、労働者組織と大学との関係については大学人の意図でもって説明がなされている。

そこで本論文では、マンスブリッジは労働者になぜ、どのような大学教育が必要であると訴えたのか、また労働者への大学教育の提供を実現するために大学の機能をどのようにとらえ、大学に何を求めようとしていたのかを検討し、その実践を考察する。主たる史料は、『ユニヴァーシティ・レビュー』や『生

* 短期大学部幼児教育科

『生活協同組合ニュース』などの雑誌や新聞等にマンスブリッジが1910年頃までに発表した論文である。

1. アルバート・マンスブリッジの教育歴

(1) 19世紀末の労働者階級の教育

マンスブリッジの教育歴をみていく前に、当時のイングランドの労働者階級の教育状況を主として労働者組織との関係という観点と、教育制度の確立という観点からまとめる。

19世紀末の労働者階級の教育の進展には労働者組織の成熟が不可欠であった。イングランドでは、1850年代、60年代の経済的繁栄を背景として、富裕な熟練労働者層のあいだで自助と節約の精神が広がり、自らの生活を維持、向上していくために生活協同組合、友愛協会、労働組合といった相互扶助団体が組織された。一方、1876年と1884-85年の選挙法改正によって、大半の労働者階級の男性に選挙権が付与されることとなり、「労働代表委員会」から労働党、社会民主連盟、独立労働党といった政治団体も組織された。19世紀末頃になると次第に労働者階級の人々も様々な種類の団体や協会に5つか6つは所属し、多様な余暇活動を展開していたことがわかっている³。こうした労働者組織の多くは、教育を自らが直面していた社会問題や政治問題を解決する方途として重要視しており、独自の教育活動を展開していた。

労働者組織のなかで最も教育活動に積極的であった団体は、生活協同組合である。80年代から組合員を対象に協同組合主義や簿記、経済史のクラスを実施しており、90年代後半にはさらに一般的な経済問題、産業問題、地方自治問題を学ぶクラスの実施が議論されていた。

このように、労働者組織が教育の重要性を認識しはじめた背景には、基礎教育の定着があった。イングランドでは、1870年教育法の制定と基礎学校の設置、1880年の就学強制の導入、そして1891年の基礎教育の無償化、これらの政策によって19世紀末までにはすべての子どもたちに基礎学校教育をという目標は達成されつつあった。さらに、基礎学校に接続し、より上級の教育を提供する、ハイヤー・グレード・スクールといった学校も出現した。労働者階級の人々における基礎教育の定着は、彼らがその後の教育につながる基礎的な知識を獲得することを意味した。そのため、基礎学校から大学までの国民教育制度の確立要求につながっていった。たとえば、労働組合会議は、第40回年次大会で、「われわれは、教育政策によって、完全な民

衆のコントロールの下での、自由にして世俗的な基礎学校（primary school）から大学に至る国民教育制度の設立を、将来の市民の安寧に不可欠なものとして要求する」という決議を採択している⁴。

一方、中等教育の整備は、まだ始まったばかりであった。1902年教育法の制定によって公立中等学校の設置が規定され、労働者階級の人々にも中等教育への道がようやく開かれた。そのため、中等学校が設置され、すべての者に中等教育が提供されるようになるのはまだ先のことである。もちろん、大学で学ぶことができる労働者階級の子弟はほとんどいなかった。

しかし、この時期、労働者階級の人々を対象とした中等教育段階以上の教育の機会が、全くなかったわけではない。オックスフォード大学やケンブリッジ大学が実施した大学拡張講義があった。大学拡張講義は、地方に在住する高等教育を学びたいという人々を対象とし、大学が認定した講師が地方を巡回し実施する、6回から12回の講義やクラスからなる出張出前講座である。1892-93年のオックスフォード大学拡張委員会が実施した講座の概要をみると、124の地方センターが組織され、164の講座が開設され、受講生は約2万人であった⁵。受講生の多くは、高等教育を受ける機会が奪われていた女性、とくに中流階級の女性であった。労働者階級の人々の割合はおよそ四分の一程度といわれる。人口比率から考えると、労働者階級の人々の参加割合は低い。また、大学拡張講義を受講した労働者階級の人々は、特定の地域に偏っていた。それは、主として生活協同組合が支援する地方センターに多くの労働者階級の受講生が集い、学んだためであった。

この時期、労働者階級の人々の多くが基礎教育後に社会に出ており、中等教育以上の学校教育を受けることは容易ではなかった。とはいえ、彼らの一部は、学校教育以外の教育機会を有していた。特に所属していた労働者組織のなかで学習していたのである。

(2) マンスブリッジの教育歴

WEAの設立者であるマンスブリッジは、1876年にイングランド南西部グロスターシャーの中心都市であるグロスターで生まれた。彼は、大工の父親と生活協同組合運動の活動家であった母親の間に、男ばかり4人兄弟の末っ子として誕生した⁶。父親は大工であったが棟梁をつとめており、また母親は家事と市民活動に従事していた。このことから、彼の生家は、父親の収入だけで一定の生活を送ることができるいわゆる「労働貴族層」であったといえよう。また、長兄のウ

ウィリアムはろうそく製造会社で油脂を専門とする職に就いており、のちに地域での科学協会の活動が評価されてリバプール大学の名誉学位を授与されている。次男のアレンは、関税・間接税省の中級役人であった。マンスブリッジは、この2人の兄から影響を受けた。

マンスブリッジの教育歴・学習歴は、実に多彩であった。まずは彼の学校教育についてみていく⁷。マンスブリッジは、義務就学年齢前の4歳から地域の学務委員会立基礎学校 (Jessop Road board school) の幼児クラスに通い始めた。彼が学校教育をスタートさせた1880年は、前述の学校のない地域に学務委員会が学校を設置することを定めた1870年教育法が制定されてまだ10年しか経っておらず、ようやく10歳までの強制就学が導入された年であった。マンスブリッジは、教育の制度化が本格化し始め、基礎教育が無償ではなかった時期から学校教育を受けることができたのである。

マンスブリッジは、父親の仕事の関係から1881年にロンドンに転居した。その後も幼児クラス (Bolingbroke Road board school infant class) で学び、就学年齢の5歳からはまた別の学務委員会立学校 (Surry Lane board school) に進学して学んだ。彼は、9歳の時に、4歳年上の次男アレンの後を追うかたちで、先生のすすめもあり奨学金試験を受けた。試験に合格し奨学金を得て、1886年からバターシーのミドル・スクール (Sir Walter St. John's Middle School) に転学している。さらに別の奨学金試験を受けて合格し、12歳からはバターシー・グラマー・スクールに進み、14歳まで修学している。グラマー・スクールでマンスブリッジは、読み書き計算を中心とした基礎教育以上の中等教育を享受できただけでなく、これまでの労働者階級の文化とは異なる中流階級の文化にふれ、感化された。例えば、クリケットを楽しんだり、友人の父親との交流から影響を受けている。

上述のように、当時の義務就学年齢は10歳までであり、たいいていの子どもは読み・書き・計算を中心とした基礎教育のみの教育で学校教育を終えるのが一般的であった。1885年の時点で基礎学校に就学する子どものうち12歳以上の者は14%を占めるにすぎなかった⁸。こうした当時の教育状況を鑑みれば、グラマー・スクールで中等教育を受けることができたマンスブリッジの学校教育経験は、かなり恵まれたといえよう。

しかしながら、14歳でマンスブリッジは学校を離れ、職に就いた。彼は、学校をやめた理由を自伝のなか

で述べている。それによれば、家庭の財政的事情から学校をやめたわけではない。というのも、すでに3人の兄が定職に就いており、とくに長男のウィリアムが彼の勉学の継続を支持し、支援を申し出た。ウィリアムは働きながら夜間にユニヴァーシティ・カレッジで化学を学んでおり、学校教育の重要性を理解していたと考えられる。しかしながら、父親が、他の兄弟と同様という方針から14歳を過ぎても学校に残ることを許さなかった。こうした理由から彼は、1890年に学校を辞め、鱈肝油や肥料を扱う商店に就職した。マンスブリッジは、優秀な子どもではあったが、労働者階級の家における教育の限界を経験したといえる。

マンスブリッジは、その後も働きながら様々な成人教育機会をとらえて学んだ。90年代後半のロンドンには多様な成人教育の機会がすでに用意されており、彼はそれらを容易に利用できた。離学直後にマンスブリッジが受講したのが、大学拡張講義であった。ルイス (Vivian B. Lewes) 教授による自然科学の「空気、火、水の化学」という講座に参加したマンスブリッジは、「魅力あふれ刺激的な経験であった」と振り返って述べている。もともと勉強熱心で優秀な彼は、講座終了後の試験で優れた成績を修め、表彰されている⁹。彼にとって大学拡張講義は、比較的容易に大学レベルの講師から直接学ぶことができる、基礎教育以上の内容を取り扱う、魅力的でかつ実際的な学習機会であった。

マンスブリッジは、大学拡張講義だけでなく、伝統的の大学で正規の学生として学ぶ道も絶えず模索していた。1894年10月、18歳の時に生活協同組合連合が実施していたオックスフォード大学のオリエル・カレッジで学ぶことができる奨学金試験 (Hughes-Neale Scholarship) を受験している。結果は不合格であった。試験の様子をマンスブリッジは次のように述べている¹⁰。

カレッジのホールで不可解なラテン語、ギリシャ語と格闘したあの3日間は決して忘れられない経験であった。

この奨学金試験の受験資格は、生活協同組合の組合員およびその子弟であった。彼が受験した時の合格者は、マンチェスターのオーウェンズ・カレッジの学生であった。上述の引用からもわかるように、当時の大学教育に必要な古典、ギリシャ語とラテン語の能力がマンスブリッジには欠けていた。奨学金

試験を受験するにあたってマンスブリッジは、後に英国国教会の主教となるチャールズ・ゴアの個人教授を受けていた。あまり成果は上がらなかったようである。これは、14歳までにグラマー・スクールを去らなければならなかった労働者階級の子弟が抱える限界でもあった。マンスブリッジにとってこの奨学金試験は、労働者階級の子弟の大学進学が非常に狭き道であること実感させる機会にもなった。

同時に、奨学金試験を受験するためにオックスフォードに行き、大学の建物に入ったそのこと自体がオックスフォード大学や町への憧れを強める機会にもなった。生活協同組合の雑誌にこの時のオックスフォード大学並びにオックスフォードの町並みについての記事を寄せている¹¹。その記事から、当時マンスブリッジが「尖塔の町」オックスフォードの町の雰囲気強烈な憧れをもっていたことが読みとれる。

マンスブリッジは、20歳をすぎると、学ぶ側から教える側へ変わる。多様な労働者階級の成人教育の場で教師をつとめた。英国国教会に改宗後、日曜学校の教師をつとめている。また、以下で詳細に述べるが、98年からは生活協同組合のクラスで講師を、99年からはロンドン学務委員会管轄下の学校において夜間学級のパートタイム教師をつとめている。こうした経験は、労働者階級の人々の教育意識を直接知る機会となったであろう。たとえば、夜間学級でマンスブリッジが依頼されたタイプライティング、産業史、経済学のクラスのうち、経済学のクラスは十分な受講生が集まらなかったため開講されなかった。他方、タイプライティングのクラスは人気が高く、多くの受講生が集まった。このことは、労働者成人の学習志向が実学に向いていることを彼に実感させることとなったと考えられる。

こうしたマンスブリッジの教育経験は、後の彼の主張と実践に影響を与えたであろう。また多様な成人教育機会に学習者、教師として参加した経験を通じて、彼は成人教育機会の重要性和問題点を認識したと考えられる。

(3) 生活協同組合運動への参加

1890年代後半にマンスブリッジが精力的に取り組んだのは、生活協同組合の教育活動であった。マンスブリッジの両親はともに生活協同組合員であり、特に母親は前述のように生活協同組合女性ギルドの熱心な活動家であった。こうした両親との関係から、マンスブリッジは20歳の時（1896年）に卸売協同組合お茶部門に転職し、生活協同組合の教育活動に関わり始める。

この頃の生活協同組合の教育活動は「大論争」期と

いわれ、教育問題がさかんに議論された時期であった。生活協同組合の教育実践家たちの一部は大学拡張講義に目を向け、生活協同組合員における大学拡張講義の意義を主張していた¹²。例えばロバート・ホルステッド（R. Halstead）は、協同組合連合と各大学の大学拡張委員会との連携を模索していた生活協同組合員の一人である。彼は、1896年に任命された協同組合連合臨時教育調査委員会の委員であり、かつヘブデンブリッジで地域の協同組合による大学拡張講義の実施を手がけていた。ホルステッドは、大学人と直接関わるなかで彼らを信頼するようになっていた。1893年にヘブデンブリッジのホールにおいて開催された会合のなかで大学拡張運動を展開する大学人について次のように述べている¹³。

彼ら（大学拡張運動に関わっている大学人：筆者注）のうち何人かは、労働者をより広い精神世界に導く手助けをすることを、すなわち過去の偉大で有能な先人による膨大な知的遺産、すべての者の共通の財産として残されるべき知的遺産を労働者が理解し、正しく評価できるよう手助けすることを自らの人生の目標であると自覚している。

またホルステッドは、労働者階級の人々の政治運動に危機感を持っていた。1880年代から90年代にかけて、社会民主連盟（1883年）、フェビアン協会（1884年）、独立労働党（1893年）といった社会主義団体や政治団体が誕生した。また、ロンドンのマッチ女工やガス労働者によるストライキにみられるように、不熟練・半熟練労働者たちによる新組合主義といわれるような労働組合運動が高揚していた。こうした状況にあって、労働運動の成功は、「労働者が理解しようと努力する経済上の問題についての幅広くかつ正確な見解をまとめる能力にかかっている。それは、よってたつべき事実についての幅広くかつ確固とした基盤を有しているときのみ可能となる」、とホルステッドは認識していた。そこで、労働者階級の人々がそうした能力を得るのに、大学拡張講義が最も適しているのだ、と彼は主張した。

マンスブリッジは、こうした大論争期にあった1896年から『生活協同組合ニュース』や雑誌などの生活協同組合の出版物に記事を投稿したり¹⁴、生活協同組合のクラスに参加し学び始めた。翌年には生活協同組合主催の協同組合主義と産業史のクラスの講師をつとめている。マンスブリッジは、生活協同組合の教育において非常に優秀な成果を残した。産業史上級コースの

試験官をつとめたオックスフォード大学リンカン・カレッジのホブソン (J. Hobson) は、彼の試験結果について次のように報告している¹⁵。

その点数が示すように、答案の質は非常によくなった。最初の6つの答案は、表現力とともに産業史についての広範かつ正確な知識を有していることを証明していた。特に、マンズブリッジ、マックスウェル、ワトキンスの回答は、きわめて高い水準に達していた。…(中略)…概して、結果は非常に満足のいくものであった。

マンズブリッジの名前は、ファーストクラスの一番目に記されている。彼の成績は、その年度のトップであったことがわかる。

マンズブリッジは、産業史でのこの結果が認められ、1898年に生活協同組合の年次集会である協同組合会議の教育集会に参加する機会を、さらに99年にオックスフォード大学で拡張講義のサマー・スクールの期間中に開催された生活協同組合オックスフォード地区協会主催の会合で「生活協同組合運動と市民の教育との関係」という題目で演説する機会をえた。マンズブリッジはこの時はじめて、生活協同組合連合代表のグレイ (J. C. Gray)、協同組合連合教育委員会議長のスミス (D. Smith)、そしてホルステッドら生活協同組合の教育指導者層と、またサドラー (Sadler)、マリオット (J. A. R. Marriott)、ショウ (H. Show) らオックスフォード大学の大学拡張委員会の主だったメンバーらと交流できた。

しかしマンズブリッジの主張は、彼らに好意的に受け入れられることはなかった。『協同組合ニュース』に掲載された会合の様子を報告する記事によれば、マンズブリッジの演説は、多用した比喩や回りくどい表現によって、非常に聞きづらかったという。また、その内容は、マンズブリッジの意図に反して、それまでの生活協同組合連合と大学拡張委員会との連携を批判するものと受け取られた。

このころのマンズブリッジの主張は、『生活協同組合ニュース』に掲載された記事から読み取れる¹⁶。マンズブリッジは、生活協同組合の教育事業が抱える課題を3つ指摘している。第一に、生活協同組合の教育と、政府、地方自治体、大学による既存の多様な教育機会との住み分けができていないこと、第二に、娯楽的要素の強い、さほど効果的でない事業を実施していること、第三に、教育への関心の低い組合が多く存在していることである。そのうえで、生

活協同組合と大学拡張講義との連携を主張した。具体的には、生活協同組合がすでに実施している産業史とシティズンシップのクラスを各大学拡張委員会に任せること、ただし生活協同組合が経費を負担することを提案した。その他に、地方の大学拡張センターを支援すること、大学進学のための奨学金制度を拡充すること、中等教育段階でのミドル・スクール進学のための奨学金を新設することを提案した。しかし、なぜ生活協同組合がこうした教育事業を展開しなければならないのかについての説得的な説明はなかった。また、彼が指摘した問題点や提案の多くは、すでにこれまで、生活協同組合の指導者たちが述べてきたことと同じであり、新たな見解ではなかった。1890年代末に協同組合連合とオックスフォード大学とケンブリッジ大学の大学拡張委員会とが連携し、彼が提案したような教育事業を実施していた。マンズブリッジは、このことを把握していなかった。

ここまでみてきたように、マンズブリッジにとって、生活協同組合員の教育がその後の成人教育の活動の出発点であったことは間違いないであろう。生活協同組合の教育への関わりから読みとれることは、マンズブリッジのこの頃の主張が、国民教育制度改革をめざすものではなかったということである。マンズブリッジは、労働者子弟の大学進学者数をどのようにすれば増やすことができるのかについては考えていた。それは、協同組合連合が奨学金を拡充し、奨学生を増やすことによってであった。教育制度の抜本的改革を求めていくものではなかった。マンズブリッジは、労働者組織と大学との既存の関係のなかで教育のあり方を構想していたといえよう。

生活協同組合での教育活動の失敗は、彼に生活協同組合運動のなかでのみ教育活動を実施していくことの限界を意識させることにもなった。このことは、次にみる労働者を対象とした教育を展開することを第一義の目的とする新たな団体の立ち上げへとつながっていく。

2. 労働者教育協会の設立

(1) なぜ労働者により高等な教育が必要か

マンズブリッジが労働者教育協会を設立する契機となったのは、彼が『大学拡張ジャーナル』に投稿した記事にあった。1903年の1月号、3月号、5月号に掲載された「生活協同組合、労働組合主義、大学拡張—ある生活協同組合員の立場から—」でマンズブリッジが論じた内容をみていこう¹⁷。

マンスブリッジは、多くの労働者階級の人々が依然として基礎教育のみで教育を終えてしまう現状を労働者の教育の重大な問題と主張した。それは、基礎教育が読み書き計算のみに限定されており、「思考することなく、単に事実を吸収するよう促す教育」であったためであった。現状の基礎教育では、時々の見解に左右される。あるいは無責任な見解であっても言葉巧みに誘導される。そうした教育では、「知識の誤用」となる。マンスブリッジは、次のように述べている¹⁸。

「3R's」という基本的な知識が両刃の道具として作用することは確実である。それは、美しいものや真実を開く一方で、それ自体が作り出す、調子の良い新聞の安っぽく移ろいやすい見解も開く。

この時期、労働者の政治的状況は急激に変化していた。1867年の第2次選挙法改正および1884から85年の第3次選挙法改正によって、労働者は選挙権を獲得した。そのため、労働者階級の人々が有権者の6割を占めるにいたった。また1900年には、労働党の前身である労働代表委員会が結成され、そこから議会に自らの代表を送り出すことが目指された。マンスブリッジは、労働者組織による活発な政治的活動が内包する危険を強く意識していたのである。

こうした状況の中でマンスブリッジは、労働組合や生活協同組合による政治活動のあり方に疑問を抱いていた。彼は次のように論評している¹⁹。

労働組合員や生活協同組合員の現在の訴え方は、政治に打撃を与え、法律の通過に努め、抗議の意を示し、責任ある大臣に代表団を送ることである。

選挙権を持つ労働者が「時の見解に左右されてしま」ったり、「どんなに無責任な意見であっても、単に言葉を巧みに主張される意見の影響をより一層受けやすい」状況にある、とマンスブリッジは考えていた。それは、基礎教育しか受けていないため、「表面だけを見て判断を下す」ことになるからである。労働者の「思考力の欠如」が問題なのである。彼は民主主義が危険にさらされているのであると主張した。

マンスブリッジは、労働者に「真の教育」が必要であると述べる。「真の教育」とは、「思考することを導く教育である。彼のいう「真の教育」を提供する唯一の機関は、大学であった。マンスブリッジは、「大学の役割は、思考 (thought) の中心地としての役目を果たすことにある。このことは、大学のエネルギー

一すべてを、知の境界線を拡大し、真理の追究に向けること」にあると主張した。

実際の考え方をマンスブリッジは、現状では、大学拡張講義が真の教育、賢明で自由な教育を労働者にもたらすもつとも有効な方途であると考えた。しかし、前述のように生活協同組合運動を通じた大学拡張講義の伸展は望めなかった。そこでマンスブリッジが主張したのが、労働組合を巻き込むことと、教育の振興を目的とする新たな団体を立ち上げることであった。

(2) 初期の労働者教育協会

『大学拡張ジャーナル』に最終記事が掲載された5月にマンスブリッジは、主張した内容を実践に移した。1903年5月16日にマンスブリッジは、自宅で妻と二人だけで新たな団体を設けることを話し合い、自らの生活費からわずかな資金を捻出し、活動を開始する。その後直ちに、労働組合員や協同組合員である活動の賛同者を中心に暫定委員会を組織した。そして活動への理解と支持を得るべく、生活協同組合、労働組合、大学拡張当局での会合に出向き、作成したパンフレットを用いてその目的を宣伝してまわる地道な活動を展開した。1903年8月22日、マンスブリッジは、「労働組合員、協同組合員、大学拡張関係者の会合」を開き、正式に新たな団体を立ち上げた²⁰。

初期のWEAについて簡単にみておこう。協会の目的は、協会の規約第二条で「労働者の男女に対する高等教育の振興」と規定されている。もちろん実際には、高等教育の振興以外にも教育制度改革への提言など様々な教育活動を展開した。WEAは高等教育の振興を第一の目的に掲げ、広く労働者階級の教育の改善を目指し活動した団体であった。

さらに規約の第三条では、「労働者階級および教育関係者の連盟を組織する」とし、「(a) 労働者たちの高等教育への関心を喚起することによって。また、彼らの注意を既存の機関に向けることによって。(b) 教育に関する労働者の要望や意見を調査することによって。また、それらを教育院、大学、地方教育当局、教育関係諸団体に示すことによって。(c) 前述の団体と共同するにせよそうでないにせよ、これまで見落とされてきた、労働者たちが関心を有する学習のための施設を提供することによって。(d) 必要な報告書、パンフレット、書籍、雑誌を出版すること、あるいは出版を手配することによって」高等教育の振興を図ると規定された。

こうした規約にしたがって、WEAは中央当局一地区当局一地方支部からなる全国組織化を進めていっ

た。その際に、それぞれに労働者階級への高等教育の振興を目的とした「地区の団体と個人会員の連合体」を組織することとし、規約を有し、独自の個人会員および加盟団体を募り、徴収した年会費を中心とした財源をもち、各自で組織した協議会によって運営され、「規約の条項にしたがう、自立した団体」が全国各地に設けられた。1904年8月に南西部地区が、10月にレディング支部が組織されたのをスタートに、設立からおよそ10年で179の地方支部と10の地区当局が組織された。

地方当局や地方支部の設立にあたってマンスブリッジは、各地の中心的活动家を支援し、その地域の労働者組織の代表と大学人とを引き合わせ、設立集会を準備し、その地域の特徴に応じた地方組織を設け、活動を展開できるよう支援した。

WEAの活動を主に支えたのは、加盟団体であった。1914年の時点でWEAは、2,555の加盟団体を擁していた。加盟団体の内訳は表1に示すとおり、労働者組織がその大半を占めていた。地方支部ごとの加盟団体をみても、大半は労働者組織であり、なかでも労働組合がその多くを占める傾向はおおむね同じである²¹。

表1 WEA加盟団体の内訳 (1914年)

名称	団体数	%
労働組合及び支部	953	37.3%
生活協同組合	388	15.2%
成人学校・クラス	341	13.3%
労働者クラブ	175	6.8%
大学等	15	0.6%
地方教育当局	16	0.6%
教師組合	65	2.5%
教育、文芸協会	151	5.9%
その他	451	17.7%
合計	2,555	100%

(出典：Workers' Educational Association, *Eleventh Annual Report and Statement of Accounts, July 1st, 1914*, London, 1914, p. 8より筆者作成)

労働者組織以外の主な加盟団体は、大学や地方教育当局であった。大学には大学拡張当局とユニヴァーシティ・カレッジが含まれる。当時イングランドのほとんどすべての大学とユニヴァーシティ・カレッジがWEAの加盟団体となっていたことになる。

WEAの教育事業は、3つに分けられる。それは、①労働者にあった新たな教育活動の展開、②会合の開催や機関誌の発行を通じた広報・啓蒙活動、③代

表団を組織し、政府、地方教育当局、大学等に対する教育改革運動である。①の労働者にあった新たな教育活動展開については、当初、大学拡張講義がそのまま実施されていた。それが次第に、新たな教育要求が出されるようになった。マンスブリッジは、こうした声を拾い上げ、大学拡張講義を発展させた教育機会について検討しその実践を模索していくこととなる。次節ではWEA設立後にマンスブリッジが著した大学と労働者の関係のあり方と実践についてみていく。

3. 大学教育に対する要求と取り組み

(1) 労働者と大学の関係

マンスブリッジは、協会の設立後、まずは大学拡張講義の普及を目指した。その際に彼が着目したのは、労働者と大学の関係であった。彼は、協会設立の2年後の1905年に『ユニヴァーシティ・レビュー』誌において「労働者と大学」と題する論稿を発表した²²。そこで、大学について次のように述べている。「大学は真の意味で学者 (men of learning) とその弟子が集う場、有能な者が真理を探求し、それを表現したいという強烈的な願望に駆り立てられる場」であり、「名匠のように、歴史ある壁や伝統あるローブに知的・精神的活動によって生み出されるすぐれた成果を加える場」である。このような大学観を示したうえで彼は、学問は現実の生活との結びつくなかで意義を持ち、学問の場である大学が現実の生活と結びつく必要性を論じた²³。

高度な文化の起源としての大学という概念は、生活と広くかつ自由に結びつくことを前提とする。そうでなければ、大学の文化は単に学者ぶつたものとなり、大学が示す知見は現実の問題から切り離されているため価値がない。

しかしながら大学は、労働者の現実の生活と結びついておらず、労働者階級の人々の不信感や学問が現実と切り離していることから生じる、とマンスブリッジは考えていた²⁴。

労働者は、主に経済的困難に関心を持っている。彼らがしばしば表わす大学人に対する軽蔑心は、彼らに経済学を教えることを望んではいても、労働者たちが直面している失業による困難や競争的な生活を正しく理解していない大学人との接触か

ら生じるのである。

こうした理由から、マンスブリッジは、労働者と大学の関係を双方向の関係とすることを強調する。「労働者は、自らの固有で豊かな思考と経験を大学にもたらず」と述べ、労働者階級の代表者を大学に送ることを提案する。一方、労働者階級の人々に対しても、「議会において同様に、根気強く大学に対して代表者を求めることは、労働者の義務である」と説く。

マンスブリッジはその後、こうした労働者と大学との関係を変える機会をえて自らの主張を実践していく。次節ではそれをみていこう。

(2) オックスフォード大学と労働者の合同委員会

労働者と大学との関係を変え、大学の境界を超えた新たな教育活動を計画、実施すべく1907年8月に「オックスフォード大学と労働者階級」の関係テーマとした会合が開催された。この会合でマンスブリッジが演説者に選んだのは、ポーツマスの造船工であり、町の労働党議員をつとめていたJ. M. マクタビッシュであった。

マクタビッシュは、労働者がなにを求めているのか、なにが問題なのかを聴衆に明確に宣言した。その特徴は、権利として最善の大学教育を要求した点にあった。具体的には、大学に対して労働者を正規の学生として受け入れ、彼らにあった新たな歴史や経済学を要求した。一方で労働者には、大学教育を受けた後も階級の向上のために自らの階級に戻り、奉仕することを希望した。

彼の主張を受けて、WEAとオックスフォード大学との合同委員会を設置し、新たな大学の境界を超えた教育活動を検討することが決議された。合同委員会の委員は、表2・3のとおりである。

表2からオックスフォード大学の代表者全員が大学拡張運動の活動家であったことがわかる。ターナー、A. L. スミス、シドニー・ポール、H. B. L. スミス、ジマーンの5名は、WEAと協力、連携関係を築くことを求めていた。

一方、WEA側の委員になったのは、労働組合、TUC、生活協同組合、労働者クラブ、友愛協会といった当時の代表的な労働者団体の指導者たちであった。マンスブリッジは、大学側の代表者であるジマーンとともに委員会の事務局長に選任された。

合同委員会は、1907年12月から1908年10月までの間に5回開催された。財政運営上の問題を検討する財政小委員会と学習コースを検討するカリキュラム小委員

表2 オックスフォード大学の代表者

	役 職
T. B. ストロング	クライスト・チャーチ学寮長、オックスフォードの大学拡張委員会議長
H. H. ターナー	ニュー・カレッジ・フェロー、サヴィル天文学講座担当教授
A. L. スミス	ペリオル・カレッジ・フェローおよびチューター
シドニー・ポール	セント・ジョーンズ・カレッジフェローおよびチューター
J. A. R. マリオット	ウスター・カレッジ講師 大学拡張委員会事務局長 (1895～1920)
H. B. L. スミス	ブリストル大学ユニヴァーシティ・カレッジ公共政策・経済学教授、ラスキン・カレッジ執行部委員会議長、WEA執行部委員
A. E. ジマーン	ニュー・カレッジ・フェローおよびチューター

表3 労働者側の代表者

	役 職
W. H. ベリー	労働者クラブ・インスティテュート同盟事務局長、WEA執行部委員
C. W. パウアーマン	下院議員 (1906年～)、植字工ロンドン協会
R. キャンベル	友愛協会全国会議副代表
J. M. マクタビッシュ	ポーツマス町議会労働党代表議員
A. マンスブリッジ	労働者教育協会事務局長
D. J. シャックルトン	下院議員、労働組合会議議員委員会議長
A. ウィルキンソン	ロッジデイル町議会労働党議員

会が組織され、この2つの問題が集中的に議論された。委員会での議論は、『オックスフォード大学と労働者階級の教育』としてまとめられ、刊行された。同報告書は、1908年報告書と呼ばれる²⁵。

1908年報告書では、現状の大学教育の問題点、とくに大学拡張講義が抱える課題をまとめたくうえで、新しく組織されるべき学習形態としてチュートリアル・クラスの実施が提言された。労働者は、物事を幅広い観点から合理的にみたり、社会的価値について冷静に判断できるようになるために、教養教育を求めた。それは、よき市民になるために必要な資質であり、自らの階級の向上のためであった。

1908報告書は、そうした労働者の要求に応えるべく、チュートリアル・クラスを提案した。チュートリアル・クラスの特徴は、労働者組織が運営すること、小規模のクラスで教師と学生の密接な人間関係のもと大学に在住している正規の学生と同様の体系的な指導をおこなうこと、読書の習慣とエッセーの作成の義務化、大学への準備教育を提供する機会であることにあっ

た。

また、一つの科目を2年間にわたって体系的に学ぶことで、労働者成人学生が「総合かつ公正なものの見方」、「批判と省察の習慣」、そして「全体を把握する精神」を身につけることがチュートリアル・クラスの基盤であった。こうした大学水準の教養教育を保障するために、教師の地位の確保とチュートリアル・クラスに参加した労働者成人学生をその後、正規の学生として大学に進学させる道を確立することまでもが提言された。

(3) 大学に対する要求

マンズブリッジは、上述の1908年報告書の刊行に先だって、『ユニヴァーシティ・レビュー』誌に「近代大学の機能」と題する論文を発表した²⁶。そこで彼は、労働者への大学教育の提供を実現するための具体的な方策を示した。

まずマンズブリッジは、労働者が大学に入るルートの構築を主張した。具体的には、大学に直結したセミナーの開設を求めた。「大学の前哨地としての役割を果たす」セミナー、すなわち修了後に大学のディプロマ・コースへ進学することができるセミナーの開設である。そうした大学進学を実現させるためには、大学拡張講座で実施されていたわずか6～12回の講座ではなく、「明確な計画のもとである程度長期間にわたって実施されるセミナー」とすることが必要である、と彼は述べる。大学拡張講義はセミナーの宣伝機関と位置づけられた。

セミナーの教師は、大学で教鞭を執る者であり、かつ「産業生活や公共生活（public life）の厳しさを知っている学生の特異性を理解でき、教師として知識の構造を学生と共にすすんで立て直す者」が務めるべきである、とマンズブリッジは主張した。もちろん、労働者の教師もよいが、その際にはオックスフォード大学拡張委員会が実施する厳格な試験による免許の取得を条件としている。教育の水準や質の確保を意識していた。

またマンズブリッジは、労働者が大学に入学した後の教育内容をも検討しており、大学がカリキュラム改革をおこない労働者の関心に合致するカリキュラムとするよう提言した。具体的には次のような教育内容の導入を主張した²⁷。

次のことが、いよいよ明らかになりつつある。それは、社会学研究の発展を求める、非常に大きな声が、社会のあらゆる階層から大学に対しても

たらされるであろうということである。社会学は、「政治科学・社会科学」、「市民論（civics）」、「社会経済学」と呼ばれるかもしれない。

マンズブリッジは、大学のカリキュラムに当時新興の学問であった社会学の導入を主張した。この提案は、新しい提案ではない。この頃、ロンドン経済学研究所において社会学の学科が開設されるなど、社会学は大学での一定の地位を獲得し始めていた。マンズブリッジが社会学の導入を積極的に主張したのは、労働者階級の人々が持っていた知見を大学での研究や教育のなかで認めていくべきだという考え方がその背景にあった。

マンズブリッジは教育内容の改革と同時に、労働者特有の知的成果、つまり労働者たちが自らの経験から形成した知見の活用を提言した²⁸。

商学部で銀行家や鉄道専門家を関連科目の講師として招聘することは、すでに認められた原則となっている。社会に関する学問（study）を扱う学部において、認可された多様な科目を教えるために代表的な市民（労働者：筆者注）を招くことは、商学部での原則を拡大するだけである。

マンズブリッジは、こうした大学人と労働者階級の人々との直接的な関わりから得られる新たな知識の有用性について次のように述べている。労働者との直接的な関わりによって大学は、「十分に訓練された労働や公的経験のもつ豊かな知的財産を収集することになる」と。

これらの提言を実現するためにも、労働者が大学内の統治組織に参加することが必要となる。彼は次のように述べている²⁹。

財政上の支援という理由から、あるいは労働者階級の人々の重要性という理由から、労働者である代表的な市民を自らの統治組織の一員に任命するという新たな大学の方策は、さらなる拡大が可能である。

この論稿でマンズブリッジは、労働者階級の人々がオックスブリッジに進学する際につきまとった問題である授業料の高さ並びに奨学金制度のあり方、ディプロマ・コースを含む学位コースを履修する際に求められたラテン語・ギリシャ語の習得の問題には触れていない。また、労働者階級の大学進学問題

は、中等教育の問題とも関係してくる。離学年齢の引き上げや中等教育の無償化あるいは奨学金制度の拡充等の中等教育改革についてもマンスブリッジは述べていない。

一方、本論稿でマンスブリッジが示した大学への要求は、彼自身も委員をつとめていた合同委員会でまとめられた1908年報告書とほとんど同じである。なぜこの時期に彼がこの論稿を発表したのかはわからない。しかし、1908年報告書刊行以前にマンスブリッジの単著としてこの論稿が発表されたことから、マンスブリッジが1908年報告書の内容を支持していたということはある。マンスブリッジは、1905年に「労働者と大学」で示した大学観をさらに深め、大学の第一の機能である研究、新たな知の創造や真理の研究に特化する形で労働者たちの生活や経験から導き出される知見の意義を強調し、労働者の正当な大学への進学や参加を主張した。

(4) チュートリアル・クラスの実施へ

このマンスブリッジの主張は、WEAとオックスフォード大学とによるチュートリアル・クラスの実施及び大学の正式委員会として位置づけられた合同委員会の設置によって実現していく。

チュートリアル・クラスは、WEAとオックスフォードとの代表者からなる合同委員会によって運営され、10月から3月までの半年間毎週、年24回、同一の講義科目を3年間にわたって継続的、体系的に学ぶことができる、講義と討論からなるクラスであった。最初のチュートリアル・クラスは、経済史家のR.H.トニーを講師としてイングランド北部の都市ロジデルとロングトンで実施された。

WEAはオックスフォード大学と連携することで、イングランドの伝統的な大学教育より近い、学術的にもより高いレベルの教育機会を労働者階級の人々に提供することを可能としたのであった。また、奨学金を得て正規の学生としてオックスフォード大学に学び、また労働者階級の仲間たちのもとに戻って大学成人教育の発展に尽力した学生たちも現れた。この実践を詳細に明らかにすることは、残された課題である。

おわりに

本論文では、マンスブリッジの成人教育実践を彼の大学観に着目しつつ検討した。まずはマンスブリッジの教育歴を中心にWEA設立以前の教育実践を検討し、WEA設立に向けての彼の見解と実践を明らかにした

うえで、新たな教育要求に応えるべく労働者組織と大学との関係のあり方についての主張とその実践を考察した。

マンスブリッジは労働者階級の家庭に生まれながらも、多様な成人教育の場で学び、教える経験を持ち、生活協同組合運動に参加していった。そこで、大学成人教育の課題を認識し、新たな活動を展開すべく、労働組合と生活協同組合、そして大学拡張当局を教育のもとにひとつにまとめる新たな団体の創設を構想した。それは当時の社会状況、政治環境と密接に結びついていた。労働者の権限と義務の拡大を背景として、思考とそれに基づく適切な行動を導く教育の必要性が増大していた。彼の主張は、この歴史的状況の中で労働者組織の代表者にも大学人にも受け入れられた。そうして誕生したWEAは、当初は大学拡張講義の普及を主たる活動としていたが、次第に次なる段階としての大学教育への要望が出されるようになった。そこでマンスブリッジはより対等な、双方向的な労働者と大学との関係のあり方を労働者の生活や経験からえられる知見の学問における重要性を根拠に主張し、実践していったのである。

こうしたマンスブリッジの主張した大学と労働者組織との関係が当時どのように受け止められていたのかを検討することは、本論文に残された課題である。今後、WEAを支援した労働者組織の反応とWEAを批判的にみていた労働者組織の両者の反応を考察し、比較検討したい。

- 1 Goldman, L., *Dons and Workers: Oxford and Adult Education since 1850*, Oxford, 1995. マンスブリッジに焦点をあてた研究ではないが、日本においてもWEAをあつかった研究は、一定程度の蓄積がある。安原義仁「初期チュートリアル・クラス労働者成人学生のオックスフォード進学と奨学金問題—個人の上昇手段としての向上か—」友田卓爾編『西洋近代における個と共同性』溪水社、2006年。松塚俊三「独学の文化—一九～二〇世紀のイギリス労働者は何をどのように学んだか—」『国家・共同体・教師の戦略』昭和堂、2006年。矢口悦子『イギリス成人教育の思想と制度—背景としてのリベラリズムと責任団体制度—』新曜社、1998年。松浦京子「知の喜びと仲間のために—前世紀転換期イギリスの労働者成人教育運動—」望田幸男、広田照幸編『実業世界の教育社会史』昭和堂、2004年。
- 2 Jennings, B., *Albert Mansbridge the life and work so the founder of the WEA*, Leeds, 2002. その他にも

- WEAの先行研究としてPrice, T. W., *The Story of the Workers' Educational Association from 1903 to 1924*, London, 1924やStocks, M., *The Workers' Educational Association: The First Fifth Years*, London, 1953がある。
- 3 労働者階級のアソシエーション文化については、小関隆編『世紀転換期イギリスの人びと—アソシエーションとシティズンシップ—』人文書院、2000年を参照のこと。
- 4 Trade Union Congress, *Report 1908*, p.183.
- 5 Oxford University Extension Delegacy, *Report for 1892-3*, 1893, p.1.
- 6 Mansbridge, A., *An adventure in working-class education: Being the Story of the Workers' Educational Association 1903-1915*, London, 1920.
- 7 マンスブリッジの学校教育歴については、彼の自伝Mansbridge, A., *The Trodden Road, experience inspiration and belief*, London, 1940による。
- 8 オルドリッチ著、松塚俊三・安原義仁訳『イギリスの教育』玉川大学出版部、2001年、23頁。
- 9 Mansbridge, *The Trodden Road, op. cit.*, p. 23.
- 10 Mansbridge, A., "Some Aspects of Oxford: from a Worker's point of view", *The Millage Monthly*, Vol.1, No.12, September 1906, p.716.
- 11 *Ibid*, pp.715-9.
- 12 19世紀末の生活協同組合とオックスフォード大学との連携については、拙稿「19世紀末イギリスにおける生活協同組合の教育活動—オックスフォード大学拡張委員会との連携を中心に—」『日本社会教育学会紀要』、第44号、pp.51-61、2008年を参照のこと。
- 13 Halstead, R., "Working Men and University Extension", *The Oxford University Extension Gazette*, Vol.3, No.32, May 1893, p.108.
- 14 最初の投稿は、Co-operative Newsにみられる。
- 15 *Report of the Thirtieth Annual Congress of Delegates from co-operative cities in Great Britain and Ireland*, Manchester, 1898, p.72.
- 16 *Co-operative News*, 3 July 1897, 6 August 1898.
- 17 Mansbridge, A., "Co-operation, Trade Unionism, and University Extension, from a co-operator's standpoint", *The University Extension Journal*, Vol. 8, No.67, 1903; "Co-operation, Trade Unionism, and University Extension, II. Plan of Action", *The University Extension Journal*, Vol. 8, No.69, 1903; "Co-operation, Trade Unionism, and University Extension, III. An Association", *The University Extension Journal*, Vol. 8, No.71, 1903. 本節「なぜ労働者により高等な教育が必要か」にある引用はすべて上記論文からである。
- 18 *Ibid*.
- 19 *Ibid*.
- 20 労働者教育協会の設立については、拙稿「労働者教育協会 (Workers' Educational Association) の設立過程—初期の組織と活動を中心に—」、『瀬戸内短期大学紀要』、第39号、pp.1-12、2009年を参照のこと。
- 21 Workers' Educational Association, *Eleventh Annual Report and Statement of Accounts, July 1st 1914, London, 1914*, a cover page.
- 22 Mansbridge, A. "Workpeople and the Universities", *The University Review*, Vol. 1, No. 4, August 1905. 本節「労働者と大学の関係」にある引用はすべて上記論文からである。
- 23 *Ibid*. p.389.
- 24 *Ibid*. p.396.
- 25 安原義仁訳「オックスフォード大学と労働者階級の教育—労働者の高等教育と大学との関係に関する大学ならびに労働者階級代表合同委員会報告書—」広島大学高等教育研究開発センター『高等教育研究叢書』85号、2006年3月。原著は*Oxford and Working-class Education, Being the Report of a Joint Committee of University and Working-class Representatives on the Relation of the University to the Higher Education of Workpeople*, (second edition, revised), Oxford, 1951である。
- 26 Mansbridge, A., "The Functions of a Modern University", *The University Review*, Vol. 6, No. 33, March 1908. 本節「大学への要求」にある引用はすべて上記論文からである。
- 27 *Ibid*, p.170.
- 28 *Ibid*, p.176.
- 29 *Ibid*.

(受理 平成24年10月31日)

土井貴子

Abstract

The activities by Albert Mansbridge in University Adult Education :
Focusing on the Foundation of Workers' Educational Association

Takako DOI*

The objective of this paper is to present the foundation principles of Albert Mansbridge who is the founder of Workers' Educational Association (1903), giving attention to the relationships of workers' organisations.

This paper is constructed in three parts. First, I traced Mansbridge's educational experiences in his adolescent years. He seized all available educational opportunities and studied. At a time, he had a teaching experience at workers' organisation and for workers'. This experience shaped the foundation of Workers' Educational Association. Second, I looked at the articles which Mansbridge wrote three articles at the University Extension Journal. He argued the social dangers of ignorance in the working-class movement and the significance of 'Higher knowledge' for workers' organisations. He appealed for an importance to a closer alliance between the University Extension and Co-operative Society and the trade unions, and for the need to establish a new educational organisation. After that, Mansbridge put his idea into action and founded the WEA. Third, I considered Masbeidge's understanding of the functions of a university. This opinion tied in with the concept and activities of tutorial class by WEA.

(Received October 31, 2012)

* Department of Early childhood Education